私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをあらかじめ備えてくださいました。2章10節

「あなたがたは自分の背きと罪との中に死んでいた者であり、かつては、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者、すなわち、不従順の子らの中に今も働いている霊に従って歩んでいました。」(1-2)「あなたがたは」と訳されていますが、原文では「そして、あなたがたを」です。エペソ教会はパウロが開拓した教会です。彼らは元々神さまのことを知らない異邦人です。パウロによって福音を初めて聞きました。「そしてあなたがたを…、あっ、そういえば、昔のあなたたちは、ありとあらゆる罪の中に死んでいたと言えるんだよ。この世の時流に乗っかって、聖書の神さま以外のあらゆる価値観、基準、この世の神々に従って歩んでいたよなあ。」

「死んでいた」:それは息をしていない、考えることも、感じることも、行動も何もできない、溺れていることすらわからないという状態です。「背きと罪」は複数形です。神さまと出会うまでは、「あらゆる罪」の中で、罪と闘う力もなく、それどころか自分が罪の中にいることすらわからなかった、つまり「死んでいた」のです。

２節の「歩んでいました」は、その人なりの規則に従って歩く歩き方を表します。何に従っていたのでしょうか。「この世の流れ」「時流」に乗る生き方です。「おまえの考えは世の中では通用しませんよ」の「世の中では」という実態のないものがあたかも絶対的な神であるかのように用いられます。これは実際に当時（ギリシャ語で）「アイオーン」という神として信じられていました。「空中の権威を持つ支配者」と「不従順の子らの中に今も働いている霊」は同じことを意味します。当時の人々は空中を２種類に分けて考えました。「神がおられる、晴れ渡った澄んだ高い天」と、「神のおられる高い天と人の住む地の間にあって、人が神を見ないように罪に誘惑しようと悪霊が暗躍する、暗くよどんだ低い天」の二つです。そして、ここの「空中」は「悪魔のすみかとしての低い天」を指します。「空中の権威を持つ支配者」つまり「悪魔に従って」歩んでいたというわけです。本当の神さまを知らずに生きてきた人たちは「死んでいた」のであり、「世の価値観、迷信といった様々な悪い霊に支配されていた」と言うのです。

そう考えていたパウロは今度は自分たちユダヤ人に目を向けます。「私たちもみな、不従順の子らの中にあって、かつては自分の肉の欲のままに生き、肉と心の望むことを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。」(3)異邦人ばかりか、実はユダヤ人も、かつては背きと罪の中で生きていたとパウロは言います。「肉」とは生まれながらの人間性を意味します。そして、「生きる」と訳される言葉は「あちこち歩き回ること」を意味します。つまり、パウロは、「神の民ユダヤ人も、神に従わず、生まれながらの性質のまま、自分勝手な考えや欲望の赴くままに、あっちこっち歩き回り、好き勝手にいろいろとやってきた」と言うのです。

神なしの生活、自分の力で生きる、それは異邦人には様々な価値観や因習に惑わされて生きることであり、ユダヤ人には様々な欲に惑わされて生きることで、それらの行き着く先は「死」「神の怒り」でしかないというのです。

１節で「あなたがた」異邦人、２節で「私たち」ユダヤ人に言及したパウロは、「しかし」と神に目を向けます。

「しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに」(4) 直訳は「神は富んでいます。あわれみにおいて。私たちを愛するたくさんの愛があるから」です。ここの「私たち」は３節の「私たち」と同じではありません。ここの「私たち」は異邦人とユダヤ人の「私たち」の両方を併せた「私たち」です。両者とも神なしには生きられない存在と悟ったパウロは、両者を合わせて「私たち」と言い表したのです。

人にあるのは「死」であり、「罪過」「罪」「不従順」「欲」「肉」「御怒り」です。でも、神さまにあるのは「豊かさ」「憐れみ」「たくさん」の「愛」、しかも「あわれみ」も「愛」もただの感情ではなく現実の行動を伴うものです。

それでは、「大きな愛」で神さまはどうなさったのでしょうか？**「背きの中に死んでいた私たちを、キリストとともに生かしてくださいました。あなたがたが救われたのは恵みによるのです。神はまた、キリスト・イエスにあって、私たちをともによみがえらせ、ともに天上に座らせてくださいました。」**(5-6)「背きの中に死んでいた、異邦人もユダヤ人もひっくるめた私たちを」共に「生かし」「よみがえらせ」「天上に座らせて」下さったと言います。「共に生かす」との言葉は「命をつくる」との意味を持ちます。私たちをたくさん愛して下さる神さまが、罪の中で何の抵抗もできず死んでいた私たちに新しい「命をつくって」下さいました。これが「救われた」ということです。

教会に来始め、聖書を読み、礼拝で聖書の話を聞くうちに、それまで何とも思わなかったのに、自分の罪深さを思い知り「自分は何てダメなクリスチャンだろう。救われていないんじゃないか」と思ったことはありませんか？

でも、実はこれが神さまにより新しい命に生かされている証拠です。罪の中にどっぷりつかって死んでいた時には、自分がどんなに汚いか麻痺して分かりません。でも、そこから抜け出て初めて自分のいた所がどんな所か分かります。自分は罪深い人間と自覚することが生きている証拠なのです。罪からキリストのうちに移された証拠です。

更に、神さまは私たちを「ともによみがえらせて下さった」とパウロは言います。地上で生きている今も、実はよみがえりの命を生きているのです。たとえ見た目には苦しみの多い人生のように見えても、それは朽ちないよみがえりの命です。私が見ているのは永遠の神さまであり、滅びて無に終わる人生を生きているのではないのです。

そして、「ともに天上に座らせて下さった」とパウロは言います。「天上」とは「神の右の座」のことで、「神の右腕になる」ことです。神さまの一番のパートナーとして、神さまと一緒に神の国を治める働きをします。今している仕事が、勉強が、子育てが、家事が、友達とのおしゃべりも、神さまの右腕として神の国を治める仕事です。

実際、パウロはこの時獄中にいました。当時の牢獄は建物ではなく、丘をくり抜いて造った横穴のようなものだったようです。光など殆ど入って来ない狭い穴の中で、手枷足枷をつけられて自由を奪われ、閉じこめられていました。こんな不自由な中でパウロはこの手紙を書きました。パウロは、これまでも、ローマ書やガラテヤ書の中で、信じる私たちに対して「キリストと共によみがえる」「天上で着座する」ということを何度も言っていましたが、そ

れらはいずれも未来形を使って、終末の希望としての約束として表現されていました。ところが、時が経って、その間にいろいろな経験を重ね、神さまから教えられていく中、パウロはここではっきりと「共に生かして下さった」「ともによみがえらせて下さった」「ともに天上に座らせて下さった」と、既にそうされたと言い切っています。

実は、説教の冒頭で言った２章１節の「そしてあなたがたを」という言葉は、ここにつながっています。

神さまは、キリストにあって、私たちをキリストと同じ道に歩むようにして下さいました。それは、生まれつき教会で育った人であろうと、最近教会に来た人であろうと、男であろうと女であろうと、老人であろうと子供であろうと、日本人であろうと外国人であろうと、牧師であろうと信徒であろうと、神さまはここにいる一人ひとりを、分け隔てなく、豊かにあわれみ、たくさん愛して下さる故に準備して下さった道です。いのちに満ちた人生です。そこには永遠のいのちがあります。ひとりぼっちではありません。いつもイエスさまがいて下さいます。同じ使命を担う兄弟姉妹がいます。豊かなあわれみが、大きな愛がある人生です。自分にはなくても無尽蔵の神さまからいくらでもいただくことができます。神の栄光を現す人生です（７節）。全能の神さまは、あえて「私たちを通して」恵みを世に現されます。「神のみ怒りを受ける」しかない私たちが、「神の恵みのすばらしさ」を現すのです。

「この恵みのゆえに、あなたがたは信仰によって救われたのです。それはあなたがたから出たことではなく、神の賜物です。行いによるのではありません。だれも誇ることのないためです。」（8-9）

「恵みのゆえに」「信仰によって」「神の賜物・プレゼント」として私たちは救われました。「救い」は 100 %神さまの側の思いによって与えられたもので、死人であった私たちの側にできることは何一つないのだと言います。

「信じる」という行為は、自分がすることのように思いますが、相手が誠実で真実な人柄と思えばこそその人を信じるようになるわけで、結局は相手の人柄が私たちの信頼を引き出す源になるわけです。ですから、「信仰」といえども私たちの側には主導権はありません。「神の賜物」という言葉も、「神のですよ、そのプレゼントは」が直訳で、「神さまの」という言葉が強調されています。「救われた」という言葉をとってみても受身形が使われています。

つまり、これらすべては、結局のところ、自分以外の誰かにしてもらった行為を表しているのです。自分の力で自分を救ったのではありません。誰かに救ってもらったのです。「救いのわざ」に「私たちがなした、あるいはなし得ること」は、実は何一つないのです。何しろ自分では何一つできない死人だったのですから。「行いによるのではありません。」こう言って、パウロは人のなし得るあらゆる自己努力を否定します。「だれも誇らないために」。

ここまで学ぶと、自分を誇ることなど到底できないことに気づくことでしょう。それどころか、「死んでいた私を、神さまが 100 %の贈り物として救って下さった」のですから、こんな私を救って下さった神さまに感謝をささげずにはいられないのではないでしょうか。

「実に、私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをあらかじめ備えてくださいました。」（10）

罪の中で死んでいたところを 100 %神さまのプレゼントとして救い出された私たちを、パウロは「神の作品」だと言います。

これからの季節、様々な展覧会が行われます。では、それらの作品の価値はどこで決まるのでしょうか？やはり作者でしょう。誰の作かによって、その作品の価値は天と地もの差がついてしまうものです。ある番組で、自分の家にあるお宝を鑑定してもらうというのがありますが、それこそ本物か偽物かで桁が２つも３つも違ってしまうのを見ると、驚くばかりです。

この 10 節も原文では、唐突に「彼の」つまり「神の」という言葉から始まっています。私たちは「神の」作品なのです。パウロはこのことを強調したかったのでしょう。作り手は自分の作品が一番輝くすべを知っています。

私は息子が中学生の頃、ＰＴＡで文教委員というのをやりました。文化祭の時にＰＴＡコーナーを受け持って、学校の先生方や保護者の作品を展示・管理するのです。その中で、美術の先生がご自分の貴重な作品を持って来て下さいました。箱から出して、いざ先生から受け取った作品を飾ろうとしたのですが、キャンバス全体が真っ黄色な抽象画で、しかもサインも見あたらなかったので、どちらが上かよくわかりませんでした。委員のお母さん方であああだろうこうだろうといろいろ動かしてみた後で、「絶対これよ！」と全員一致で飾って当日を迎えました。生徒たちと共に展示を見に来られた美術の先生は、自分の作品の前に来ると、何も言わずに作品の上下をひっくり返してそのまま出て行かれました。それ以降、その先生からの作品の提供はありませんでした。他の人が何と言おうと、どう思おうと、作者はその作品のことを一番よく知っています。その作品を一番輝かせることができるのです。

私たちは神の作品です。そして、神さまは私たちが一番自分らしくいられるように、私たちが輝いていられるように、そのすべてを備えていて下さいます。責任をもって導いて下さいます。そうして、私たちを通して、この私たちを通して、神さまの栄光を、神さまの豊かな恵みを、神さまの大きな愛を現されるのです。罪の中にどっぷりとつかって身動きもとれずに、木偶の坊のように死んでいた私たちが、こうして神の作品として、生かされ、永遠のいのちをいただいて、神の右腕として、手足を自由に動かして、全身全霊で神さまの良い働きができるのです。何という幸せでしょうか。しかも独りぼっちではありません。イエスさまが私たちの模範としていつも一緒にいて下さり、教会の兄弟姉妹が共に神さまの働きをする同労者としているのです。何とすばらしい神さまからのプレゼントではありませんか。

それをいただいて歩みませんか。造り手なる神さまと共に歩むことこそが、私が私らしくいられる一番の方法なのですから。神さまを信じて、神さまとともに歩むことこそ、私たちが最も輝いて生きることのできる道なのです。神さまは必ず皆さん一人ひとりにとって一番よい人生、一番輝ける人生を準備していて下さいます。